No. 8

職場における「お兄さん」および「お姉さん」の親族名称使用に関する日韓対照研究

林 炫 情・玉岡 賀津雄

日本文化學報
第 18 輯
2003. 8
韓國日本文化學會

職場における「お兄さん」および「お姉さん」の親族名称使用に関する日韓対照研究

林 炫 情*・玉岡　賀津雄**

目　次

1．はじめに
2．調査方法
3．分析と結果
4．考察
5．おわりに

1. はじめに

日本語と韓国語では，兄・姉を意味する「お兄さん・お姉さん/hyeong，oppa・nuna，eonni」，おじ・おばを意味する「おじさん・おばさん/ajeossi・ajumeoni」などといった親族名称で，親族関係にない人に呼びかけることができる。このように，実際には親族関係にない人に対して親族名称を使うことを，人類学の分野では「虚構的用法（fictive use）」と呼んでいる(鈴木，1973)。この現象は，程度の差こそあれ，他の言語においても見られるようである（原，1979；井上，1991）。鈴木（1970）と井上（1991）が指摘しているように，呼称には話し手・聞き手の社会的関係をことばで確認する機能がある。さらに，あたかも同一家族の成員であるかのような呼称を用いることによって，親族でない人との密接な人間関係をつくる役割を果たしている。つまり，親族名称の虚構的用法は，緊密な仲間関係の確立のための手段(原，1979)であるといえよう。

ところで，日本語と韓国語で虚構的に使われる親族名称，とりわけ兄を意味する「お兄さん（お兄ちゃん）/hyeong・oppa」と姉を意味する「お姉さん（お姉ちゃん）/nuna・

＊広島大学　日本学術振興会外国人特別研究員　日本語学
＊＊広島大学　教授　日本語学(言語心理学)

eonni」(以下，日本語のみを提示する)の使用をよく観察すると，その用法に違いが見られる。まず，日本人と韓国人の呼称使用の実態を調査した林（2003）では，既知の年上の人に対して，韓国人は実名よりは親族名称で呼びかけることが多く，日本人は名前で呼びかけることが多いと報告している。さらに，日本語と韓国語における呼称選択の適切性に関する林・玉岡・深見（2002）の研究では，両言語では次のような場面での親族名称の使用の適切性判断において違いが見られるとしている。韓国人は職場の同僚の兄・姉を「お兄さん・お姉さん」と呼ぶことについて適切であると判断しているのに対し，日本人は否定的に受け止めている。また，初対面の小学生を「お兄ちゃん・お姉ちゃん」と呼ぶことについて，韓国人はかなりの抵抗を感じるのに対して，日本人は特に否定的でも肯定的でもないようであった。また，食堂の若い従業員を「お兄ちゃん・お姉ちゃん」と呼びかけることについては，韓国人はやや否定的に感じるようであるが日本人はやや肯定的に判断しており否定的には判断していない。以上のような林（2003）の日韓の呼称使用の実態や林・玉岡・深見（2002）で取り上げている日韓の適切性判断の違いは，日本語の兄・姉を意味する「お兄さん（お兄ちゃん）・お姉さん（お姉ちゃん）」と韓国語の兄・姉を意味する「hyeong,oppa·nuna,eoni」の使い方に微妙な違いがあることを示していると言えよう。

そこで本研究では，このような違いをより詳細に明らかにするために，日本と韓国の職場での親族名称の使用に焦点を当て，兄・姉を意味する個人親族名称が職場での年上の先輩・同僚・後輩に対して用いられる使用頻度を通して，日本語と韓国語での親族名称の虚構的用法に違いがあるかどうかを検討することにした。なお，韓国語と日本語における親族間の呼称体系の規則性（林，1998；2001）から考えると，両言語とも親族名称を用いるのは年上に対してで，年下に対しては名前で呼びかけるのが一般的である。そのため本研究でも，職場での親族名称の使用は年上に対する場合が多いと予想し，呼びかける相手がすべて年上であることを前提とした。

2. 調査方法

2.1 調査時期と被験者

2001年2月から3月に，広島県とソウル特別市で，日本と韓国の社会人を対象としたアンケート調査を実施した。今回の調査では，設定した社会的条件以外の条件を統一するために，職業は公務員および会社員に，年齢は２５歳から４５歳までに限定した。これは，日常的に上下の人間関係のなかで，ことばの使い分けに最も注意を払う職業であり，年齢層

であろうと考えたからである。被験者は日本人話者が148名で，韓国人話者が176名の合計324名である。男女別の内訳は，日本人の男性が73名，女性が75名，韓国人の男性が97名，女性が79名であった。年齢は，日本人の平均が34歳7ヶ月(標準偏差が6年と7ヶ月)，韓国人の平均が32歳3ヶ月(標準偏差が4年と8ヶ月)であり，平均でみるとかなり近い年齢層である。男女の年齢は，女性の平均が32歳0ヶ月(標準偏差が5年と6ヶ月)，男性の平均が34歳3ヶ月(標準偏差が5年と7ヶ月)であった。男女の年齢もかなり類似している。年齢は，25歳から29歳まで，30歳から34歳まで，35歳から45歳までの３つのグループに分類した。それぞれのグループの人数は，日本人被験者は，25歳から29歳までが51名，30歳から34歳までが31名，35歳から45歳までが66名であった。韓国人被験者は，25歳から29歳までが58名，30歳から34歳までが59名，35歳から45歳までが59名である。日韓，性別，年齢別の被験者数の詳細は，表１に示したとおりである。

表1 被験者の国別、性別および年齢層別の人数

国名	性	年齢層			合計
		25歳～29歳	30歳～34歳	35歳～45歳	
日本	女性	32	18	25	75
	男性	19	13	41	73
韓国	女性	35	24	20	79
	男性	23	35	39	97
合計		109	90	125	324

注: 数値の単位は人。

2.2 質問紙と測定尺度

本調査では，日本語と韓国語の職場での親族名称使用を測定するために，まず聞き手を入社後の就労年数で区別し，年上の先輩・年上の同僚・年上の後輩とした。これらに，それぞれ聞き手との関係について親しい・親しくないという「親しさ」の条件と，男女の性別の条件を加えて，３(年上の先輩・同僚・後輩)×２(親しい・親しくない)×２(男性・女性)の合計12種類の聞き手を設定した。質問票では，12種類の聞き手に対して，「お兄さん（お兄ちゃん）・お姉さん（お姉ちゃん）」という親族名称で呼びかける使用頻度を，「全くない」，「あまりない」，「わからない」，「ときどきある」，「よくある」の５段階尺度で尋ねた。点数化するにあたり，「全くない」を0，「よくある」を４とし，0から４までの変数として扱った。これを本研究では「使用頻度」とし，連続変数として分散分析を行った。質問紙の詳細は末尾にしめす。なお，紙面の都合上日本語のみを示すことにする。

3. 分析と結果

本研究では，被験者間の変数，すなわち話し手の変数として，日本人と韓国人の2グループ，年齢層が25歳から29歳まで，30歳から34歳まで，35歳から45歳までの3グループ，また男性と女性の2グループとした。次に，聞き手の変数として，親しい・親しくないの2種類の親しさと，男性と女性を設定した。これは，1人の被験者（即ち，話し手）について，4回聞き手属性を変えて同じ質問をしていることになるので，被験者内の変数による反復測定となる。そこで，被験者間変数の2(日韓)×3(年齢層)×2(性差)に加えて，被験者内変数の2(親しさ)×2(男女差)のそれぞれの平均値をもとに，聞き手が先輩，同僚および後輩の場合に分けて分散分析を行った。なお，変数が被験者間で日韓，年齢層および性差の3種類，被験者内で親しさと男女差の2種類で，交互作用が複雑であるので，すべての分散分析の結果を表2に示した。表2の網掛け部分は，有意な主効果および交互作用がみられたものである。網掛け部分を概観したところ，日韓，親しさ，話し手の性差および聞き手の男女差の変数が，網掛けされており，一貫した影響が見られることが分かる。これだけの複雑な交互作用が存在する分析であっても，ある程度の規則性が見出せる。なお便宜上，聞き手と話し手の性別に関する変数を区別するために，聞き手は「男女差」とし，話し手は「性差」と示す。以下では，それぞれの分散分析の結果について詳細に検討する。

表2 分散分析の結果一覧

被験者要因		変数名	聞き手の属性		
			先　輩	同　僚	後　輩
被験者間要因(話し手)	主効果	日韓	$F(1,312)=118.34$, $p<.001$	$F(1,312)=24.28$, $p<.001$	$F(1,312)=6.87$, $p<.001$
		性差(話し手)	$F(1,312)=4.51$, $p<.05$	n.s.	n.s.
		年齢層	n.s.	n.s.	n.s.
	交互作用	日韓×性差(話し手)	n.s.	n.s.	n.s.
		日韓×年齢層	n.s.	n.s.	n.s.
		性差(話し手)×年齢層	n.s.	n.s.	n.s.
		日韓×性差(話し手)×年齢層	$F(2,312)=3.04$, $p<.05$	n.s.	n.s.
被験者内要因(聞き手)	主効果	親しさ	$F(1,312)=161.55$, $p<.001$	$F(1,312)=66.99$, $p<.001$	$F(1,312)=50.17$, $p<.001$
		男女差(聞き手)	$F(1,312)=6.39$, $p<.01$	$F(1,312)=6.98$, $p<.01$	$F(1,312)=4.56$, $p<.05$
	交互作用	親しさ×男女差(聞き手)	$F(1,312)=5.80$, $p<.05$	n.s.	n.s.
被験者間および被験者内要因	交互作用	日韓×親しさ	$F(1,312)=32.85$, $p<.001$	n.s.	n.s.
		日韓×男女差(聞き手)	n.s.	n.s.	n.s.
		日韓×親しさ×男女差(聞き手)	n.s.	n.s.	n.s.
		性差(話し手)×親しさ	$F(1,312)=7.64$, $p<.01$	n.s.	n.s.
		性差(話し手)×男女差(聞き手)	$F(1,312)=48.03$, $p<.001$	$F(1,312)=34.59$, $p<.001$	$F(1,312)=9.65$, $p<.001$
		性差(話し手)×親しさ×男女差(聞き手)	$F(1,312)=14.93$, $p<.001$	$F(1,312)=6.90$, $p<.001$	$F(1,312)=5.47$, $p<.05$
		年齢層×親しさ	n.s.	n.s.	n.s.
		年齢層×男女差(聞き手)	$F(2,312)=5.67$, $p<.001$	n.s.	n.s.
		年齢層×親しさ×男女差(聞き手)	n.s.	n.s.	n.s.
		日韓×性差(話し手)×親しさ	n.s.	n.s.	n.s.
		日韓×性差(話し手)×男女差(聞き手)	$F(1,312)=39.32$, $p<.001$	$F(1,312)=31.90$, $p<.001$	$F(1,312)=4.98$, $p<.05$
		日韓×性差(話し手)×親しさ×男女差(聞き手)	$F(1,312)=11.93$, $p<.001$	$F(1,312)=13.86$, $p<.001$	n.s.
		日韓×年齢層×親しさ	$F(2,312)=4.08$, $p<.05$	n.s.	n.s.
		日韓×年齢層×男女差(聞き手)男女差	n.s.	n.s.	n.s.
		日韓×年齢層×親しさ×男女差(聞き手)	n.s.	n.s.	n.s.
		性差(話し手)×年齢層×親しさ	n.s.	n.s.	n.s.
		性差(話し手)×年齢層×男女差(聞き手)	n.s.	n.s.	n.s.
		性差(話し手)×年齢層×親しさ×男女差(聞き手)	n.s.	n.s.	n.s.
		日韓×性差(話し手)×年齢層×親しさ	n.s.	n.s.	n.s.
		日韓×性差(話し手)×年齢層×男女差(聞き手)	n.s.	n.s.	n.s.
		日韓×性差(話し手)×年齢層×親しさ×男女差(聞き手)	n.s.	n.s.	n.s.

注1: n=324. nsは有意差がなかったことを示す。Pは有意であったことを示し、その後にくでその有意水準を数値で表記した。

注2: 主効果は、特定の変数が親族名称の使用頻度に有意に影響していること、交互作用は複数の変数が異なって有意に影響していることを示す。

注3: 女性であるか男性であるかの影響は、0(女性)、1(男性)の変数で分析し、話し手の場合は「性差」と呼び、聞き手の場合は「男女差」と呼んで区別した。

3.1 年上の先輩に対する親族名称使用

先輩に関する項目について上記のように分散分析を行った結果，被験者間の要因である日韓[$F(1,312)=118.34$, $p<.001$]および話し手の性差[$F(1,312)=4.51$, $p<.05$]の主効果が有意であった。日韓では，韓国人(M=0.35)に比べ，兄・姉を意味する親族名称を用いる頻度はかなり高く，話し手の性差では，女性(M=1.06)のほうが男性

(M=0.83)より有意に高かった。年齢層の主効果は有意ではなかった。この結果は，年齢層の違いは影響を及ぼす要因でないことを示唆している。しかし，日韓，性差および年齢層の交互作用が有意であった[F(2,312)=3.04，p<.05]。

被験者内要因である聞き手の男女差[F(1,312)=8.39，p<.01]，および親しさ[F(1,312)=161.55，p<.001]の主効果も有意であった。聞き手の男女の違いでは，男の先輩に対して(M=0.87)よりも，女の先輩に対して(M=1.02)親族名称をよく使う傾向がみられた。つまり，職場の先輩に対する親族名称の使用においては，「お兄さん（お兄ちゃん）」という親族名称よりは，姉に対する「お姉さん（お姉ちゃん）」という親族名称が多用されていることが分かる。また，親しさでは，親しい先輩に対する場合(M=1.31)が，親しくない先輩に対する場合(M=0.59)に比べ，親族名称の使用頻度がより多くなることが分かった。また，親しさと男女差の交互作用が有意であった[F(1,312)=5.80，p<.05]。これは，親しくない男の先輩に呼びかける場合(M=0.55)が他の条件に比べて低いことに起因している。ちなみに，最も多用されているのは親しい女の先輩に呼びかける場合(M=1.42)であった。

表3 日・韓の年上の先輩に対する親族名称使用の平均と標準偏差

問柄		韓国人（平均と標準偏差）						日本人（平均と標準偏差）					
		女性			男性			女性			男性		
		25～29歳	30～34歳	35～45歳	25～29歳	30～34歳	35～45歳	25～29歳	30～34歳	35～45歳	25～29歳	30～34歳	35～45歳
親しい	男性	1.94 (1.61)	0.71 (1.27)	2.90 (1.74)	2.04 (1.46)	2.09 (1.62)	2.21 (1.70)	0.25 (0.76)	0.61 (1.14)	0.52 (1.12)	0.32 (0.95)	0.46 (1.13)	0.27 (0.74)
	女性	3.29 (1.13)	2.33 (1.81)	3.15 (1.31)	1.43 (1.47)	1.43 (1.60)	1.28 (1.43)	0.59 (1.19)	1.17 (1.50)	0.56 (1.12)	0.68 (1.25)	0.69 (1.11)	0.44 (1.03)
親しくない	男性	0.83 (1.18)	0.42 (1.18)	1.30 (1.56)	0.91 (1.16)	1.29 (1.23)	1.05 (1.32)	0.00 (0.00)	0.22 (0.73)	0.12 (0.33)	0.05 (0.23)	0.23 (0.60)	0.17 (0.59)
	女性	1.57 (1.42)	2.21 (1.47)	1.35 (1.42)	0.74 (0.96)	0.97 (1.18)	0.59 (0.97)	0.00 (0.00)	0.33 (0.84)	0.12 (0.33)	0.05 (0.23)	0.31 (0.63)	0.20 (0.64)

注: 括弧内は標準偏差。

被験者間および被験者内の要因による交互作用では，日韓と親しさ[F(1,312)=32.86，p<.001]が有意であった。これは，韓国人が親しい先輩に対して親族名称で呼びかける場合(M=2.07)が多いことを示唆している。全体的に，日本人も韓国人も親しくない先輩に対してよりも，親しい先輩に対して親族名称を用いることが多いことが分かった。さらに，話し手の性差と親しさに交互作用がみられた[F(1,312)=7.64，p<.01]。親族名称を用いる頻度は男性より女性のほうが高く，特に親しい相手に対して用いることが多かった。話し手の性差と聞き手の男女差の交互作用[F(1,312)=43.03，p<.001]，および，話し手の性差と親しさおよび聞き手の男女差という，3つの要因間の交互作用[F(1,312)=14.90，p<.001]も有意な違いが認められた。全体的にみると親族名称の使用は，異性の先輩より同性の先輩に対して，特に親しい間柄で呼びかけやすいようであり，その傾向は女性の場合に顕著にみられる。また，年齢と聞き手の男女差に交互作用がみられた[F(2,312)=6.67，p<.001]。しか

し，大きな違いはみられなかった。さらに，日韓と話し手の性差および聞き手の男女差の交互作用[$F(1,312)=39.32$，$p<.001$]，そして日韓と話し手の性差と親しさと聞き手の男女差の交互作用[$F(1,312)=11.93$，$p<.001$]も有意であった。全体的に，日韓の男性と女性は異性の先輩に対してよりも同性の先輩に対する場合に親族名称を使う頻度が高く，しかも親しい相手に対する場合に顕著にみられる。最も使用頻度が高かったのは韓国人女性で，親しい女の先輩に対して呼びかける場合(M=2.15)であった。日韓と年齢と親しさの交互作用[$F(2,312)=4.09$，$p<.05$]も有意であった。これは，韓国の35歳から45歳までのグループが親しい先輩に対して用いる場合が他の条件に比べると非常に高いこと(M=2.38)と日本の25歳から29歳までのグループが親しくない先輩に対して用いる場合(M=0.03)が極めて少ないことに起因している。

3.2 年上の同僚に対する親族名称使用

同僚に関する項目について上記の分散分析を行った結果，被験者間の要因である日韓[$F(1,312)=24.28$，$p<.001$]に主効果がみられた。具体的には，年上の同僚に対して親族名称を用いる頻度は，日本人(M=0.37)より韓国人(M=0.90)のほうが高かった。しかし，先輩に対する場合に比べるとその使用の頻度はかなり低い。話し手の性差と年齢には主効果がみられなかった。

また，被験者内要因である親しさ[$F(1,312)=66.99$，$p<.001$]，および聞き手の男女差[$F(1,312)=6.98$，$p<.01$]の主効果はすべて有意であった。親族名称を用いる頻度は，親しい同僚(M=0.85)に対する場合が親しくない同僚に対する場合(M=0.42)よりも有意に高く，聞き手の男女においては，男の同僚に用いる頻度(M=0.58)よりも，女の同僚に用いる頻度(M=0.69)がやや高かった。つまり，先輩の場合と同様に，年上の同僚に対し，「お兄さん（お兄ちゃん）・お姉さん（お姉ちゃん）」といった親族名称で呼びかける頻度には，親しいか親しくないか，また聞き手が男性か女性かの要因が深く関係していることが分かる。

表4 日・韓の年上の同僚に対する親族名称使用の平均と標準偏差

間柄		韓国人（平均と標準偏差）						日本人（平均と標準偏差）					
		女性			男性			女性			男性		
		25～29歳	30～34歳	35～45歳	25～29歳	30～34歳	35～45歳	25～29歳	30～34歳	35～45歳	25～29歳	30～34歳	35～45歳
親しい	男性	0.94 (1.49)	0.50 (0.93)	0.85 (1.35)	1.57 (1.38)	1.71 (1.66)	0.85 (1.42)	0.31 (0.82)	0.78 (1.17)	0.44 (0.92)	0.68 (1.25)	0.46 (1.13)	0.37 (0.92)
	女性	2.03 (1.69)	1.46 (1.86)	1.35 (1.90)	1.00 (1.13)	1.09 (1.36)	0.56 (1.17)	0.38 (0.91)	1.00 (1.33)	0.40 (0.91)	0.68 (1.39)	0.54 (1.13)	0.39 (0.92)
親しくない	男性	0.49 (0.92)	0.25 (0.68)	0.45 (0.83)	0.70 (1.06)	1.00 (1.26)	0.38 (0.85)	0.00 (0.00)	0.33 (0.84)	0.08 (0.28)	0.21 (0.54)	0.31 (0.85)	0.24 (0.83)
	女性	1.11 (1.32)	0.88 (1.42)	0.75 (1.25)	0.48 (0.73)	0.94 (1.24)	0.36 (0.74)	0.00 (0.00)	0.33 (0.84)	0.08 (0.28)	0.16 (0.50)	0.38 (0.87)	0.24 (0.83)

注: 括弧内は標準偏差。

被験者間および被験者内要因の交互作用をみると，話し手の性差と聞き手の男女差[F(1,312)=34.59，p<.001]と話し手の性差，親しさ，および聞き手の男女差[F(1,312)=18.90，p<.001]が有意であった。全体的に，「お兄さん（お兄ちゃん）・お姉さん（お姉ちゃん）」といった親族名称は，異性の同僚よりも同性の同僚に対して用いやすいようである。しかし，先輩の場合に比べるとその使用の頻度は全体的に低いといえる。そのなかでも，有意に低かったのは女性が親しくない男性に対して用いる場合(M=0.27)であった。日韓と話し手の性差と聞き手の男女差にも交互作用がみられた[F(1,312)=31.90，p<.001]。また，日韓，話し手の性差，親しさおよび聞き手の男女差の交互作用も有意であった[F(1,312)=13.86，p<.001]。全体的にみると，年上の同僚を親族名称で呼びかける頻度は，韓国人の方が日本人より高く，特に同性の親しい同僚に対して用いる場合が高かった。他の条件より有意に高かったのは，韓国人女性が親しい女の同僚に用いる場合(M=1.61)であった。

3.3 年上の後輩に対する親族名称使用

年上の後輩に対する親族名称使用は，分散分析の結果，日韓[F(1,312)=6.97，p<.01]に主効果がみられた。日韓では，日本人(M=0.36)よりも韓国人(M=0.64)のほうがやや使用頻度が高いものの，両者とも年上の先輩や年上の同僚の場合に比べるとその使用頻度はかなり低い。また，被験者内要因である親しさ[F(1,312)=50.17，p<.001]および聞き手の男女差[F(1,312)=4.58，p<.05]に有意な主効果が認められた。親しさでは，親しい後輩に対して親族名称を用いる頻度(M=0.66)が親しくない後輩に対する場合(M=0.34)より有意に高かった。しかし，先輩や同僚に比べるとその違いはあまりない。聞き手の男女においては，男性の後輩(M=0.47)より女性の後輩(M=0.53)に対する使用頻度がやや多かったものの，全体的には低い数値であった。

被験者間および被験者内要因である話し手の性差と聞き手の男女差の交互作用[F(1,312)=9.85，p<.001]が有意であった。さらに，話し手の性差と親しさおよび聞き手の男女差[F(1,312)=5.47，p<.05]の交互作用にも有意差が認められた。これは，女性が親しい女の後輩に対して用いる頻度が他の条件より高いこと(M=0.81)，そして男性が親しくない女性に対して用いる頻度(M=0.30)が低いことに理由があるのであろう。しかし，使用頻度そのものは低いといえる。また，日韓と話し手の性差と聞き手の男女差に交互作用がみられた[F(1,312)=4.98，p<.05]。最も使用頻度が高かったのは，韓国人女性が年上の女の後輩に対して呼びかける場合(M=0.82)であった。しかし，これは先輩と同僚の場合に比べると高い使用頻度とはいえない。

表5 日・韓の年上の後輩に対する親族名称使用の平均と標準偏差

間柄		韓国人（平均と標準偏差）						日本人（平均と標準偏差）					
		女性			男性			女性			男性		
		25～29歳	30～34歳	35～45歳	25～29歳	30～34歳	35～45歳	25～29歳	30～34歳	35～45歳	25～29歳	30～34歳	35～45歳
親しい	男性	0.80 (1.16)	0.63 (1.24)	0.80 (1.54)	0.74 (1.14)	1.00 (1.37)	0.62 (1.18)	0.16 (0.57)	0.83 (1.20)	0.40 (0.91)	0.63 (1.16)	0.46 (1.13)	0.37 (0.86)
	女性	0.83 (1.34)	1.25 (1.75)	0.95 (1.70)	0.74 (1.14)	0.94 (1.35)	0.44 (0.97)	0.25 (0.76)	1.06 (1.35)	0.52 (1.05)	0.63 (1.16)	0.46 (1.13)	0.37 (0.86)
親しくない	男性	0.54 (1.04)	0.33 (0.92)	0.45 (1.00)	0.35 (0.71)	0.60 (1.03)	0.26 (0.68)	0.03 (0.18)	0.39 (0.85)	0.28 (0.74)	0.26 (0.56)	0.23 (0.60)	0.17 (0.63)
	女性	0.69 (1.18)	0.71 (1.16)	0.50 (1.00)	0.35 (0.71)	0.60 (1.03)	0.18 (0.51)	0.00 (0.00)	0.39 (0.85)	0.16 (0.47)	0.26 (0.56)	0.23 (0.60)	0.17 (0.63)

注: 括弧内は標準偏差。

3.4 親族名称使用における聞き手の属性の影響

以上の分析では，変数が多くなるため，聞き手の属性である年上の先輩・同僚・後輩を変数として含めなかった。しかし，以上の分析結果を検討しているうちに，先輩・同僚・後輩という聞き手の属性が親族名称の使用頻度に影響していることが示唆された。そこで，親族名称の用い方がこの3種類の聞き手でどう違っているかを検討するために，6番目の被験者内変数として，聞き手の属性（先輩・同僚・後輩）を含んで分析を行った。ただし，被験者間変数のうち年齢層（3）と性差（2）を除いて，被験者間変数の2(日韓)×被験者内変数の2(親しさ)×2(男女差)×3(先輩・同僚・後輩)の分散分析を行った。

その結果，職場の先輩・同僚・後輩という聞き手の属性に有意な主効果がみられた[$F(1,322)=85.60$, $p<.001$]。やはり，親族名称で呼びかける頻度が最も高かったのは，先輩に対する場合(M=0.92)であった。次に同僚に対する場合(M=0.64)，そして後輩に対する場合(M=0.50)の順であった。また，日韓[$F(1,322)=58.85$, $p<.001$]，親しさ[$F(1,322)=143.20$, $p<.001$]および聞き手の男女差[$F(1,322)=5.52$, $p<.05$]の主効果も有意であった。これら3つの変数の主効果は，これまでの分析からも予測できる結果であろう。

以上の結果のうち，本分析でとりわけ興味深いのは，聞き手の属性と日韓に有意な交互作用がみられたことである[$F(1,322)=87.55$, $p<.001$]。つまり，韓国人と日本人の親族名称の使用に基本的な違いがみられた。まず韓国人の場合，最も使用頻度が高かったのは，先輩に対して呼びかける場合(M=1.54)であり，次が同僚，そして後輩の順であった。一方，日本人の場合は，親族名称を用いる頻度は，先輩(M=0.35)，同僚(M=0.37)，後輩(M=0.36)が，ほぼ一定でほとんど違いが見られなかった。日本人の場合，使用頻度は全体的に低く，相手が誰であっても職場ではあまり親族名称が用いられていないようである。

また，聞き手の属性と親しさの交互作用[$F(1,322)=47.53$, $p<.001$]が有意であった。親族外で使われる親族名称は親しい相手、親しくなりたい相手に対して親しみを込めて用いるのが一般的である。そのため，職場の場合においても親しくない先輩・同僚・後輩に対し

てよりは，親しい人に対する使用頻度が高かったと考えられる。最も高かったのは親しい先輩に対して用いる場合(M=1.24)であった。また，聞き手の属性，日韓，親しさの交互作用[$F(1,322)=26.71$，$p<.001$]も有意であった。使用頻度が最も高かったのは，韓国人の親しい先輩に対して用いる場合であった。

4. 考察

本研究では、兄を意味する「お兄さん（お兄ちゃん）/hyeong・oppa」と姉を意味する「お姉さん（お姉ちゃん）/nuna・eonni」といった個人親族名称が職場での年上の先輩・同僚・後輩に対して用いられる使用頻度を通して、日本語と韓国語での親族名称の虚構的用法に違いがあるかどうかを検討した。その結果，以下の４つのような新たな知見を得た。なお，日本人と韓国人が年上の先輩・同僚・後輩に対して，兄を意味する「お兄さん（お兄ちゃん）」，姉を意味する「お姉さん（お姉ちゃん）」の親族名称で呼びかける頻度を，全体的に把握しやすいように図１に示した。

第１に，日韓の違いが明瞭にみられた。図１の棒グラフ全体から分かるように，日本人より韓国人の方が親族名称を頻繁に用いることが分かる。表2の分散分析の結果に示したように，日本人と韓国人の間で，使用頻度が，年上の先輩・同僚・後輩で一貫して有意に異なっていた。林(2003)の行った日本人と韓国人の呼称使用の実態調査では，既知の年上の人に対して，韓国人男性の70.0%，韓国人女性の53.2%が相手と自分との相対的位置関係に応じた親族名称で呼びかけると回答している。一方，日本人は親族名称を用いる頻度は低く（男性が5.3%，女性が3.0%），むしろ実名や愛称で呼びかけることが圧倒的に多かった（男性が86.0%，女性が82.9%）。このような親族名称の使用における日韓の違いは，職場での人間関係に限定した本調査でも同様であった。

第２に，分散分析で年上の先輩・同僚・後輩について常に有意な主効果を示した親しさの度合いをみると，図１からも分かるように，親族名称は親しくない関係よりも親しい関係にある先輩・同僚・後輩に対して，より頻繁に用いられる傾向が強い。これは親族名称の使用目的が相手との緊密な仲間関係の確立の手段であることを裏付けるものであり，非親族に対して親族名称を用いることは相手との親しい関係を暗示することでもあると解釈できよう。

第３に，聞き手の男女差の要因に注目してみると，親族名称の使用は，全体的に聞き手が男性よりも女性である場合に用いることが多いことが分かった。つまり，日本語では「お姉さん（お姉ちゃん）」が，韓国語では弟から姉に対する「nuna」と，妹から姉に対する「eonni」という親族名称が多用される。また，聞き手の男女差と被験者間要因である

話し手の性差の間の交互作用に有意な違いが認められたことで，日本語では年下の女が年上の女に「お姉さん（お姉ちゃん）」，韓国語でも年下の女が年上の女に「eonni」と呼びかけることが多く，女性から女性への使用がより頻繁に見られることが明らかになった。つまり，親族名称は異性の相手よりは同性の相手に対して呼びかけやすいようである。

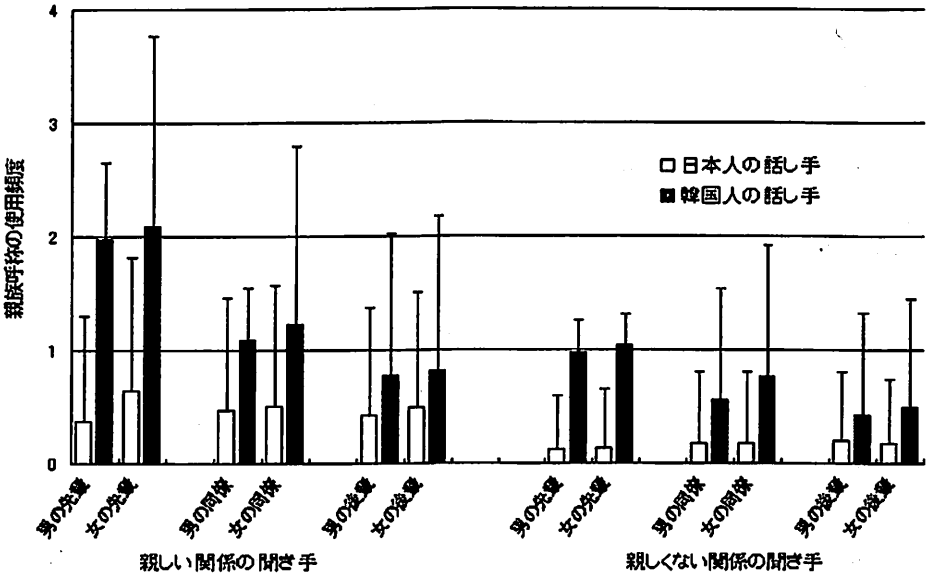

図1 「お兄さん・お姉さん」の親族呼称使用に関する聞き手の属性別日韓比較
注：棒グラフは韓国人と日本人の呼称使用頻度を示す。なお、棒グラフ上の線は標準偏差を示す。

第4に，聞き手の先輩・同僚・後輩という職場での上下関係の影響をみると，図1から分かるように，韓国人の場合は，先輩に対して親族名称を頻繁に用いる傾向があり，次に同僚，そして後輩の順で，年上かつ職場での就労年限の長い人に対して，親族名称がより頻繁に使われる。つまり，後輩に対しては相手がたとえ年上であっても親族名称で呼びかけることはあまりない。これは，職場での就労年限が，年齢よりも優先されることを示しているのであろう。一方，日本人の場合は，先輩，同僚および後輩に対する親族名称の使用頻度は一様に低く，大差はないようである。日本人は韓国人に比べると，親族ではない人に対して「お兄さん・お姉さん」の親族名称で呼びかけることは稀であることがわかる。

5. おわりに

以上のように本研究では，職場での親族名称の虚構的用法，とりわけ，兄・姉を意味する「お兄さん、お姉さん/hyeong・oppa，eonni・nuna」に焦点を当てて調査を行った。その結果、職場での「お兄さん/hyeong・oppa」および「お姉さん/eonni・nuna」の使用頻度は日本人より韓国人のほうが圧倒的に高いことが明らかになった。日本人と韓国人の親族名称の使用頻度の違いは大変興味深い点である。一般的に，職場で非親族の他人に対して親族名称で呼びかけることはないと予想される。しかし，韓国人は職場でも頻繁に用いているのに対し，日本人はあまり用いていない。これは，日本人と韓国人の対人関係意識に違いがあるを示唆していると考えられる。韓国では，職場の人間関係においても，頻繁に親族名称で呼びかけることによって，より親密な関係をつくりあげようとする。つまり，会社など本来なら利益追求が目的である集団であっても，親族名称で呼びかけることで，兄弟や姉妹のような関係をその集団内に築くことができる。これに対し日本人は年上の人に対してであっても，血縁関係がない場合にはあまり親族名称で呼びかけないのが一般的である。少なくとも，日本人は職場において親族名称を使用することで，緊密な人間関係を築こうとはしないのである。また，日本人が血縁関係のない人に対して「お兄さん」や「お姉さん」などと呼びかける場面の多くが，道などで子供に対して用いる場面か飲食店の従業員に話しかける場面が多いこと，そして兄姉を意味する「姉さん」や「兄貴」などがある種の職業と結びついて使われたり，ヤクザ映画で使われるなど，日本語で「お兄さん・お姉さん」の親族名称が他人に使われる場合はある特殊な状況であることも，職場での親族名称の使用が敬遠される理由であると考えられる。そのため，日本人は職場で，親族名称よりも「先輩」など，他の呼称を用いて親しみを表しているのかも知れない。これに関連して，ソウル地域の大学生を対象にした調査がある（皇甫，1993）。それによると，年上の学校の先輩に対して，「お兄さん・お姉さん」に当たる「hyeong,oppa・nuna,eonni」といった親族名称で呼びかけることは非常に多いが，日本語の「先輩」に当たる「seonbae」と呼びかけることについては，その使用対象と頻度に違いが見られた。その結果，日本語の一般的な使用と異なり，親しい先輩(4歳から5歳年上)に対して(男性の5.4%，女性の11.0%)よりは親しくない先輩(4歳から5歳年上)に対して（男性の35.1%，女性の35.7%），より頻繁に使用される傾向がみられた。このような結果は，韓国語の「先輩」を意味する「seonbae」が，親族名称に比べて，少し距離をおいた呼び方であることを示唆するのであろう。また，親族名称の虚構的用法，つまり親族でない人を親族名称で呼ぶことについては，内と外という観点を取り入れると，日本人は韓国人より血縁集団としての親族の内と外を分ける傾向が強いとも解釈できる。しかし，これからもう一歩踏み込んで考えた場合，職場での親族名称の使用頻度から見えてくるのは，韓国人は親しいか親しく

ないかという親疎関係よりも年齢や序列の上下関係をより重視して親族名称を用いているのに対し，日本人は上下よりも親疎関係をより重視して親族名称を用いているということである。

今後は、被験者を本研究で取り上げていない10代、50代、60代まで拡大し、また有職者のなかでも企業の従業員の規模、職種別にその使用を調査することで、より厳密な記述を目指していきたい。

【参考文献】

・皇甫奈映 (1993) 「현대 국어 호칭의 사회언어학적연구 － 서울지역 대학생사회의 용법을 중심으로」 서울大学　修士論文

・井上史雄 (1991) 「お兄さんとお姉さんの謎－親族名称と呼称の構造」『月刊言語』20(7), p.46-51.

・林炫情 (2003) 「非親族への呼称使用に関する日韓対照研究」『社会言語科学』5(2), 社会言語科学会 p.20-32.

・林炫情・玉岡賀津雄・深見兼孝 (2002) 「日本語と韓国語における呼称選択の適切性」『日本語科学』11, 国立国語研究所, p.76-100.

・林炫情(2001)「日本語と韓国語における呼称の対照研究序論」『国際協力研究誌(広島大学大学院国際協力研究科紀要) 』7(2), p.107-121.

・林炫情(1998)「日本語と韓国語における呼称の対照研究－自称詞と対称詞を中心に」広島大学大学院国際協力研究科　修士論文(未公開)

・鈴木孝夫 (1970) 「親族名称による英語の自己表現と呼称」『慶応義塾大学言語文化研究所紀要』1, p.147-175.

・鈴木孝夫 (1973) 『ことばと文化』 岩波書店

・原忠彦 (1979) 「親族名称」原忠彦・末成道男・清水昭俊 (編) 『ふぉるく叢書 9 －仲間』, 弘文堂 p.253－308.

【質問文一覧】

あなたは職場で以下の間柄の人に対して「お兄さん（お兄ちゃん）・お姉さん（お姉ちゃん）」などを使って呼ぶことがありますか。それぞれの相手について、あてはまるもの【(1)全くない(2)あまりない(3)わからない(4)ときどきある(5)よくある】に〇を付けてください。

1. 親しい年上の男の先輩
2. 親しい年上の女の先輩
3. あまり親しくない年上の男の先輩
4. あまり親しくない年上の女の先輩
5. 親しい年上の男の同僚
6. 親しい年上の女の同僚
7. あまり親しくない年上の男の同僚
8. あまり親しくない年上の女の同僚
9. 親しい年上の男の後輩
10. 親しい年上の女の後輩
11. あまり親しくない年上の男の後輩
12. あまり親しくない年上の女の後輩

【Abstract】

In Japanese and Korean, the kinship terms elder brother and elder sister were originally used for addressing family members. However, these kinship terms can also be used to address people who are not family members. This usage is called the fictive use of kinship terms. In a questionnaire, the present study asked whether a person addresses others at work as elder brother and elder sister in Japan and Korea. A total of 324 office workers, 148 Japanese from the Hiroshima area in Japan and 176 Koreans from the Seoul area in Korea are participated in the study. The analyses of the study showed the following interesting results. First, in an office situation, Koreans were likely to use the kinship terms more frequently than Japanese. Koreans tend to build up a closer relationship with coworkers by frequently using the kinship terms elder brother and elder sister. In contrast, the Japanese seldom address people at work by these kinship terms. Second, closeness or intimateness between a speaker and listeners at work was a major factor in the use of kinship terms. Both Japanese and Korean are likely to use the kinship terms with coworkers when they have a close relationship. Third, these kinship terms are used among people of the same gender. Fourth, working experience at the same company or public office determines frequency of the use, especially among Koreans. The kinship terms are used with persons who entered a company or public office earlier than the speaker, but not with those who entered the same year as the speaker, and to the much lesser degree with those who entered after the speaker. Contrary to Koreans, Japanese seldom use these kinship terms with anybody at work.

キーワード：親族名称の虚構的用法、お兄さん・お姉さん、職場、日韓対照研究

투　　고 : 2003. 5. 31
2차 심사 : 2003. 6. 11
3차 심사 : 2003. 7. 8

住　所: 日本、広島県東広島市鏡山 1 丁目 7 番 2 号 広島大学大学院国際協力研究科
電　話: +81-824-22-7111
E-mail : lim@hiroshima-u.ac.jp